

令和元年十一月投句

赤レンガ色を濃くして夕時雨

夫婦岩幣白々と神迎

山寺の山門静か石露の花

節子

耳遠き女あきんど冬紅葉

真理子

静かなる白丁の列神迎

笑み湛え説くや小春の宣教使

鶉騒ぎ手水の音の静かなる

残照の立山連峰神迎

葡萄棚ワインレッドに紅葉し

勝利

錦秋やスイッチバックの駅に降り 由紀子

裏路地にパン焼く匂ひ小春風

雲去りて初冠雪の奥穂高

天から降りそそぎたるごと石露の花

冬立ちぬ恙無き日の続くやう

光子

小春日の温泉宿にゆるりひとときを